

日中文化交流の華華しさと日中政治文化の同異

— 菅茶山の史詩的漢詩「開元琴歌」論 —

李 均 洋

【キーワード】 菅茶山、開元琴歌、史詩、日中文化交流と政治文化

1. はじめに

菅茶山（1748～1827）著『黄葉夕陽村舎詩』前編8巻付録2巻5冊、漢詩797首、後編8巻4冊、漢詩924首、遺稿詩集7巻付録1巻及び文集4巻4冊、漢詩471首、延べ漢詩2192首。それぞれは文化9年（1812）3月、文政6年（1823）11月、天保3年（1832）4月に刊行され、全編13冊は弘化4年（1847）秋に刊行された。

「菅茶山の『黄葉夕陽村舎詩』は『山陽詩鈔』とともに、江戸時代に最もひろく読まれ、最も売行きの良い詩集である。」^①

中村真一郎氏の評論を借りていうと、「江戸人にとって、最大の思想家は疑いもなく宣長よりも徂徠だったろうし、詩人の芭蕉よりも茶山だったかも知れない」^②。中国人が初めて編集した日本漢詩集である清末の大儒俞樾（1821～1906）編『東瀛詩選』44巻（明治16年-1883年刊行）は、日本漢詩人530名の5300首あまりの漢詩を収め、その中の巻11は菅茶山の漢詩120首を収めている。

菅茶山の漢詩「開元琴歌」は七言古詩、天明6年（1786）末に完成、延べ70行490字、真部一韻で貫通しているのである。

本稿は既存の先行研究と異なり、中日比較文化の視野で「開元琴歌」を論述することを試みる。

2. 「開元琴歌」の日中文化交流の時空観

江戸中後期の学僧、漢詩人六如（1734～1801）は「開元琴歌」を「大篇大議論、包括千年、歴歴叙出、不費力、非才豪学博、則何臻于此。（大篇大議論、千年を包括し、歴歴として叙出している。力を費やさず、才豪学博にあらずや、なにをかこれまでに臻したや。）」^③と評価した。

確かにこの漢詩は氣勢盛んで、「歳修隣好通使船」即ち630年、舒明天皇朝である犬上御田鍬を大使とする第一回目遣唐使節団の出航から書き始め、「松声断続冬夜闌」即ち1786年冬夜までという一千年以上の歴史時空に亘っている。中国古代詩人と違って菅茶山はこの一千年あまりの歴史を貫いて、中日対照歴史観と文明観により、中国上古の周文王（約紀元前1152～1056）から日本江戸後期の光格天皇（1779～1817在位）朝までの漢詩意象を作り出した。

菅茶山は情熱的に遣唐使を代表とする日中文化交流を歌っている。

維昔李唐全盛日	維れ昔李唐全盛の日
歳修隣好通使船	歳どし隣好を修して使船を通ず
滄波浩蕩如衽席	滄波浩蕩として衽席の如し
生徒留学動百千	生徒の留学動もすれば百千
吉備研究盧鄭学	吉備は研究す 盧鄭の学
朝衡唱酬李杜篇	朝衡は唱酬す 李杜の篇
此時典籍多越海	此の時典籍多く海を越れるは
豈止服玩与豆籩	豈に止だ服玩と豆籩とのみあらんや ^④

この八詩句の背景は、唐王朝の繁盛期には、日本政府が630年から838年までの間、次第に15回の遣唐使を派遣して長安に着いた。その中の開元5年即ち日本元正天皇養老元年（717）の遣唐使団の人数が557人、開元21年（733）の594人、天宝11年（752）の220人の規模だったのである。これらの大勢の交流使者は船に乗って広広とした大海を経過し、命を賭けて交流の使命を負うのである。吉備真備（693～775）や朝衡（安倍仲麻呂の中国名、698～770）などはこれらの使者の代表なのである。前者は717年長安に留学、735年に日本に帰ったが、後に遣唐副使として再び長安に赴き、中国文化の日本での伝播に大きな貢献をした。後者は同じく717年に、長安での留学生生活を開始し、在唐53年間、亡くなるまでずっと日中交流に尽力している。「盧鄭学」とは中国漢代末の盧植と鄭玄との古今学、「唱酬李杜篇」とは安倍仲麻呂と李白、杜甫は詩友でよく漢詩を唱和しているのを指す。「豆籩」は「籩豆」とも言われ、古代祭祀や宴会時によく使われる禮器なのである。言い換えれば、遣唐使を代表とする中日文化交流は、典章制度、文学芸術や文物服飾などすべての政治と文化との領域に行き渡って、大いに日本社会の文明建設と発展を促進したのである。

「開元琴」はこういう中日文化交流の象徴である。

この琴は開元12年（724年、この年が甲子年、詩人に「乙丑」と誤記されている）に製作され、漢詩「開元琴歌」（1786年）を造る時までにはもう一千年以上の歴史を持っている。

「此琴当代称難得（此の琴当代得難しと称す）」、つまり唐の開元年間でも、この琴は珍しくて、日本に伝えて来て更なる稀な宝物になった。^⑤

「不意殊域万里外、永鎖鳳象在荒山（意はず殊域万里の外、永く鳳象を鎖して荒山に在らんとは）。」

「殊域」と「鳳象」との二つ詩語は深い意味がある。東晋・孫綽（314～371）「喻道論」はいう、「周之泰伯、遠棄骨肉、託跡殊域、祝髮文身、存亡不反。（周の泰伯、骨肉を遠く棄れ、殊域に託跡して、祝髮文身、存亡反さず。）」^⑥『説文』はいう、「鳳、神鳥也。天老曰：鳳之象也，鴻前麟後、蛇頸魚尾、鸛頸鴛腮、龍文虎背、燕頤雞喙，五色備舉，出於東方君子之國，翱翔四海之外，過崑

崑崙、飲砥柱、濯羽弱水、暮宿風穴、見則天下大安寧。（鳳、神鳥也。天老曰く、鳳の像也、鴻前麟後、蛇頸魚尾、鸛頸鴛腮、龍文虎背、燕頤雞喙、五色備な挙ぐと、東方君子の国に出で、四海の外に翱翔し、崑崙を過ぎ、砥柱に飲み、羽を弱水に濯ぎ、暮に風穴に宿る、見はるれば則ち天下大いに安寧。）^⑦つまり、「殊域」と「鳳象」は対照的な詩歌意象を形成した、即ち文明未発達
の「殊域」日本に国家安寧を象徴する吉祥物である「鳳象」——開元琴が伝来した。

「東方君子の国」はどこにあるか。『山海経・大荒東経』は「東海之外大壑、少昊之國……大荒之中、有山名曰合虛、日月所出……有東口之山。有君子之國、其人衣冠帶劍。（東海の外に大きな壑があり、そこに少昊の国……大荒の中に山あり、名は合虚。日月の出るところ……東口の山あり。君子の国あり、人は衣冠をつけ、剣をおびる。）^⑧」という。

必ずしも「君子の国」が日本を指さなくても、「無乃靈物尋靈地、乗桴遥向日東天（乃ち靈物の靈地を尋ね、桴に乗り遥かに日東の天に向ふも）」の「日東」は確かに日本国の別称なのである。菅茶山の故郷南部の名勝である鞆の浦には江戸元禄期の建造物「対潮楼」があり、朝鮮通信史李邦彦が1711年書写した「日東第一形勝」の横額を掛けている。

「殊域」即ち「日東」（日本）、「鳳象」即ち「靈物」である「開元琴」。詩歌意境における「殊域」は日中文化交流の時空たる觀念であるが、「鳳象」は詩人菅茶山の中日政治文化史觀を託する哲学觀念である。前文に言及したように、開元・天宝年間の三回派遣された遣唐使団の最大級の規模は日中交流史上の希有な文化現象といってよい。というのは当時は唐王朝の政治文化を「鳳象」——国家が豊かで天下安定、国民がにこにこして幸せな生活を過す——と見て、国の財力を挙げて遣唐使団を派遣して学習と交流とを行っているのである。

が、どうして「永鎖鳳象在荒山（永く鳳象を鎖して荒山に在らんとは）」という極めて不幸な意象が出たのか。

ここから詩人菅茶山は中日歴史の対照叙事を展開した。「一朝胡塵塞道路、彼此消息雲濤懸。（一朝胡塵 道路を塞ぎ、彼此 消息 雲濤遥かなり。）」「胡塵」とは天宝14年（755）の「安史の乱」、この戦乱によって日中間の交流が隔てられた。「鴉兒北帰郡国裂、白雁南渡衣冠殫。（鴉兒 北に帰つて郡国裂け、白雁 南に渡つて衣冠殫く。）」つまり唐末の一群雄である李克用が率いる兵隊はみな黒い衣装なので、「鴉軍」と称され、唐僖宗の救命を受けて黄巢の一揆勢力を破り、後に朱全忠の軍団との合戦に敗れ、山西北部に敗退、すると唐王朝も滅びてしまった。「北帰」は敗北滅亡の意味もある。「白雁」とは元代初期の武将伯顔（名前）と同じ発音での掛けことば、「南渡」とは1276年伯顔が蒙古軍を率いて南宋の都である臨安を攻めて宋恭帝を取り押さえたこと、「衣冠殫」とは歴史典故、北宋末宋高宗が長江を渡り、臨安を都としたこと、つまりこの歴史典故を借用して南遷した宋王朝の滅亡を指すのである。

こういう戦乱の苦情は日本も同じ。「我亦王綱一解紐、五雲迷乱兵燹烟。（我亦王綱一たび紐を解き、五雲迷乱す 兵燹^{へいせん}の煙。）」「我亦」即ち我が日本も同じという心情、この並列言葉は詩

人菅茶山に認識された中日政治文化の共通点を強調している——我が国も綱紀が廃ってしまつて御所天空の五色瑞雲が戦乱の狼煙に蔽われている。「壇浦魚腹葬劍壑、芳河花草埋錫鑾。(壇浦の魚腹 劍壑を葬り、芳河の花草 錫鑾^{うず}を埋む。)」壇浦は寿永4年(1185)源平合戦地、平氏が敗れ、平宗盛が捕虜となり、平氏に擁護される安徳天皇が沈海した。言い換れば、平安時代(794～1192)末から開始した源平の内戦が終結、日本歴史は初めて武家によって政権を掌る鎌倉幕府時代(1192～1333)に入った。「壇浦」と対偶する「芳河」は「吉野川」の漢語式表記、「埋錫鑾」という詩語即ち鎌倉幕府は1333年鎌倉幕府将軍の家臣である足利尊氏に攻められて滅亡、後醍醐天皇が都に返って親政、が、足利尊氏は兵隊を率いて京都に進入、光厳天皇を擁立した。一方、吉野に脱出した後醍醐天皇は自ら正統を宣告した。すると、北朝(京都光厳天皇)と南朝(吉野後醍醐天皇)との対立局面が形成され、南北朝時代(1336～1392)に突入したのである。

「爾来豪右耽争鬪、人枕銀帛席金鞍。文物灰滅無余燼、鍾簾羊存属等閑(爾来 豪右 争鬪に^{ふけ}耽り、人々銀帛を枕にし金鞍を席にす。文物灰滅して余燼なく、鍾簾羊存^{よじん} 等閑に属す。)」

「開元琴歌」を作成した1786年は平安末期の武家戦乱からすでに六百年間を経ていた。この間には鎌倉幕府が室町幕府に滅され、室町幕府が江戸幕府に代られ、戦乱争鬪は止まないで、「中古教化号隆盛、楽律和協礼儀端(中古の教化 隆盛と号し、^{がくりつ}楽律和協し礼儀^{ただ}端し)」に厳然たる対立となっている。つまり、この六百年間の武家割拠による戦乱は礼楽制度及び文化遺産を酷く損失させたから、「鍾簾」即ち天皇を始めとする社稷天下は有名無実、武家幕府に操られている。注意すべきのは、「中古」という時代称号なのである。「邦家の経緯、王化の鴻基」といわれる日本史上の最古の皇家史書『古事記』(712年成立)は上・中・下三巻に分け、上巻の歴史時期が神代即ち神話時代、下巻が仁徳天皇から推古天皇までの時代を記す。応神天皇(約三世紀)には朝鮮半島の百済を経由して儒教が日本に伝来、応神天皇の継承者仁徳天皇が「聖帝」と称され、下巻は仁徳天皇から開始、天皇家の政治思想観が儒教的天皇観となったのである。詩人菅茶山は王道即ち尊王論者だから、ここの「中古」とは「神代」及び『古事記』中巻における伝説的な天皇時代に対して、『古事記』下巻である仁徳天皇の儒教礼楽制度以来、奈良と平安時代を含めているのである。これは詩人の「雅変風変同一轍、時往事往誰追還。(雅変じ風変ずるは同一の轍、時往き事行きも誰か追還せん。)」という嘆きに証左されている。いわゆる「雅変風変」、即ち「詩大序」中の「至於王道衰、禮儀廢、政教失、国異政、家殊俗、而變風變雅作矣。(王道衰へ、礼儀廢し、政教失い、国々政を異にし、家々俗を殊にするに至って、變風變雅作る。)」^⑨

「中古教化号隆盛、楽律和協礼儀端。(中古の教化 隆盛と号し、楽律和協し礼儀端し。)」

この二句は「開元琴歌」における中日政治文化交流時空の帰結と言える。つまり「李唐全盛日(李唐全盛の日)」と日本の「中古」の「楽律和協礼儀端(楽律和協し礼儀端し)」はもはや人々の憧れる歴史となっていたので、その理想的盛かな時代は何時頃回復されるのか。詩人菅茶山の嘆き詩句の中にはこんな意味合いをはっきりと抒情しているのではないか。

3. 「憤り」——「開元琴歌」詩情の駭きほど歴史真実

清人俞樾が『東瀛詩選』の中に「開元琴歌」を高く評価している。「礼卿（菅茶山の字）詩各体皆工、而憂時感事之忱、往往流露行間、亦彼中有心人也、其『開元琴』一首、借題抒憤、可想見其懷抱。」（礼卿の詩は各々のスタイルが皆すばらしい。そして憂時感事たるまごころは往往として行間に流れ表し、亦それに有心人なり。その「開元琴」一首は、借題抒憤、その懷抱を想見せられる。）^⑩

「開元琴歌」の情感基調は一つの文字「憤り」に集中している。例えば「我亦王綱一解紐（我亦王綱一たび紐を解き）」の「解紐」、「五雲迷乱兵燹煙（五雲迷乱す^{へいせん}兵燹の煙）」の「迷乱」、「壇浦魚腹葬劍壑（壇浦の魚腹^{ほうむ}劍壑を葬り）」の「葬」、「芳河花草埋錫鑾（芳河の花草^{うず}錫鑾を埋む）」の「埋」、「禍水有源言之醜（禍水源あり^{うら}之を言へば醜く）」の「禍水」、「爾来豪右耽爭鬪（爾来^{ふけ}豪右^{はじ}争鬪に耽り）」の「争鬪」、「文物灰滅無余燼（文物灰滅して余燼なく）」の「灰滅」、「最恨軍府創新式（最も恨むらくは軍府新式を創め）」の「最恨」、「雅變風變同一轍（雅變^{よじん}じ風變するは同一の轍）」の「雅變風變」など、みな詩人菅茶山の「憤り」を抒情しているのである。

前述したように、「開元琴歌」の作成が天明6年（1786）、日本近世史上の「天明年代」（1781～1787）は暗く悲惨な実景が刻まれている。天明3年（1783）の浅間山大噴火を兆しとして、天明大飢饉の苦難が降掛かってきた。この数年間の大飢饉は「全国的な規模をとったが、とくに生産力の低い東北地方が中心であった。無慮数十万にのぼる餓死者とききんにつきものの伝染病の死者を出し、死人の肉はおろか、生きたものどうし殺し合って食べるというこの世ながらの地獄図絵を現出した。幕府・諸藩の対策はあいかわらず不徹底で、そのうえ『餓死した者は、百姓や町人ばかりであって役人衆には一人の死者もなかった』（清水文弥著『郷土史話』、邦光堂1927年）といわれる。」^⑪この時期の政治の特徴は、「田沼の政治には当然、いろいろによる取引が行われた。当時、長崎奉行になるのに二千両、目付は千両と相場がきまっていたというから、老中などになるにはもっと多額の金が必要だったことであろう。ただ政治の腐敗と墮落がとくに田沼時代に指摘されたのは、田沼がむしろそれを正当化する態度をとったためであった。『金銀は人の命にかへがたき程の宝なり。其宝を贈りても御奉公いたし度と願ふほどの人なれば、其志上に忠なる明なり。志の厚薄は音信の多少にあらはるべし。……予日々登城して国家の為に苦勞して、一刻も安き心なし。只退朝の時、我邸の長廊下に諸家の音物おびただしく積置たるを見るのみ、意を慰するに足れり』（馬場文耕『江都見聞集』、宝暦7年—1757年）という。かれのことが、その信念をよく示している。』^⑫

江戸幕閣の老中の中心にいる田沼意次（1719～1788）が赤裸裸に金権政治と賄賂政治との政治信念を表わしたことからわかるように、天明年間の天災とともに政治の失行も大飢饉の上に更な

る社会危機を招いたのである。

詩人菅茶山の故郷である福山藩は天明6年(1786)農民一揆も発生した。菅茶山の天明7年(1787)初に作成した七律「窮鄰」は水害蝗災に襲われた福山藩民の衣食困窮の悲惨さを血涙たる写實的批判的に表わしている。

擬頒斗米賑窮鄰	斗米 ^{わか} を頒 ^{にぎわ} つて窮隣 ^{にぎわ} を賑さんと擬し
自笑山厨未太貧	自ら笑う 山厨 ^{さんちゆう} 未だ太だしく貧ならざるを
時変歡虞三世治	時変 ^{かんぐ} 歡虞 ^じ 三世の治
病深草莽五朝臣	病は深し 草莽 ^{ひと} 五朝の臣
社前林麓偏含雨	社前 林麓 ^{ひと} 偏えに雨を含み
蝗後村閭亦入春	蝗 ^{こう} 後 ^ご 村閭 ^{ひと} 亦た春に入る
慚我救荒無異術	慚ず 我れ荒を救わんと ^{こう} して異術の無きを
半生辜負讀書身	半生 辜負す 讀書の身 ^⑬

詩中の「時変歡虞三世治、病深草莽五朝臣。(時変^{かんぐ} 歡虞^じ 三世の治、病は深し 草莽^{ひと} 五朝の臣。)」二句は深い寓意がある。「三世治」とは備後国福山藩阿部家の初代藩主阿部正邦(宝永7年、1710年閏8月15日藩主就任)、二代の阿部正福(正徳5年、1715年3月12日就任)、三代の阿部正右(寛延元年、1748年11月19日就任)、在任中の藩主阿部正倫(明和6年、1769年8月29日就任、享和3年、1803年10月5日退任)、「五朝」とは中御門天皇(宝永6年、1709—享保20年、1735在位)、桜町天皇(享保20年、1735—延享4年、1747在位)、桃園天皇(延享4年、1747—宝暦12年、1762在位)、後桃園天皇(明和7年、1770—安永8年、1779在位)及び在位中の光格天皇(安永8年、1780—文化14年、1817在位)を指す。「歡虞」と「病深」は明らかな相反する意象を表わしている。「歡虞」即ち「歡娛」(嬉しくて娛樂する)、「病深」即ち「重病」。この二つの詩語を通じて三代藩主即五朝の臣下を継続している福山藩は「重病」に患っている状態——藩主の冠を喜んで樂樂と三代目まで継続しているが、臣下として五朝目に入って「重病」即ち失政して福山藩農民一揆を招き、藩民らが困窮死に臨んでいる現実をいきいきと表わしている。

大飢饉や農民一揆及び政治腐敗などからわかるように、「天明年代」は江戸幕府の四面危機、百姓苦難の年代なのである。これは「開元琴歌」の「借題抒憤」(「開元琴」という歴史題材を借りて憤りを叙する)の根源だと言える。

詩人菅茶山の「憤り」が現実生活による憂いの蓄積からなった詩情であり、「開元琴」という詩題を通じて山中の泉のように湧き出した。これは儒家思想の系譜における『詩経』である「詩可以怨」(詩は以て怨むべし)という漢詩文化の伝統でもあり、「開元琴歌」の史詩的な認識価値でもある。これによって「開元琴歌」の江戸漢詩史ないし日本漢詩史上の史詩地位が定まったのである。

4. 「開元琴歌」の「垂無極」皇統観及び俞樾の否定

俞樾は「開元琴歌」を高く評価したと同時に、次の詩句を削除した。

維吾皇統垂無極	維れ吾が皇統 無極に ^{なんなん} 垂とし
国無異姓仕世官	国に異姓なく 仕 ^{つか} ふれば官を世々にす
中古教化号隆盛	中古の教化 隆盛と号し
楽律和協礼儀端	楽律和協し礼儀端し
無乃靈物尋靈地	乃ち靈物の靈地を尋ね
乗桴遥向日東天	桴に ^い 乗り遥かに日東の天に向ふも
及至騷擾深晦迹	騷擾に至るに及びて深く迹 ^{くら} を晦まし
有待時運漸循環	時運の漸く循環するを待つこと有らんや
先生所蓄亦雷様	先生の蓄 ^{たくわ} ふる所も ^{また} 亦雷様
音其古淡貌其妍	音は其れ古淡にして貌は其れ妍なり ^⑩

日本正史である『日本書記』の記載によると、日本初代天神武天皇の橿原宮に即位されたのは紀元前660年である。明治維新後、この年を天皇紀元元年と定めている。「開元琴歌」は「借題抒憤」——平安時代末期以降の「源平」武家内戦及び鎌倉、室町、江戸幕府武家政権が武力先行、「挾天子以令諸侯」（皇帝を強制して皇帝の名前で諸侯に命令を下す）の武家政治を批判し、「王道衰、礼儀廢」（王道衰へ、礼儀廢し）即ち「楽律和協礼儀端」の理想王政がすでに存在していないのを慨嘆しているが、俞樾が指摘した詩人菅茶山の「懷抱」はいったい何であろうか。

それは俞樾に削除された詩句中の「維吾皇統垂無極」なのである。

中国の異姓革命、改朝换代に異なって、天皇を代表とする皇統が歴代幕府の武家政権の既成事実に遭った後でも、幸いに綿綿として存続している。

黒川洋一氏は次の論述がある。

江戸時代も半ばを過ぎますと、武家政治に対する批判が起こってまいります。武門が政治の大権を握っているのは、わが国本来の姿ではないのではないか、それは反国体的な現象ではないのかという考え方が生まれます。頼山陽の『日本外史』はそうした考え方に総合的な表現を与えた書物であったと思います。山陽は、『日本外史』の巻頭におきまして、わが国の兵制の沿革を通観して、武門が勃興した原因を論じております。それによりますと、わが国の上古においては、天子さまを上^{うへ}に戴き、一旦国家に事があるばあいには、天子さまみずから征伐の労をおとりになり、国民は剣を取って立つが、事が終わればまた生産に従事するという国民皆兵制をとっており、武門というものは存在せず、従って政治の大権が下に移ることもなかった。ところが、平安のなかごろから藤原氏が政権を壟断して、将帥の任を源平二氏に委ねることになる。ここにはじめて武門なるものが現われ、やがて武門が政治の大権を手中に収め、室町に

入ると大名が発生して封建社会へと移行していった。しかし、それは反国体的な体制であり、わが国本来の姿ではない。山陽はそう論じております。そうした声がだんだんと大きくなって明治維新となるわけですが、『日本外史』はそうした機運を醸成するのに大きな貢献をなしたわけであります。^⑮

周知のように、頼山陽の『日本外史』は文政12年（1829）に刊行されたが、頼山陽の恩師である菅茶山の漢詩「開元琴歌」は天明6年（1786）に作成されたから、前者より43年ほど先だったのである。

実は菅茶山の王道即ち尊王思想は『論語』の大義名分論より由来してきたのである。「開元琴歌」中の「若教清廟陳瑚璉、重見薰風被山川（若し清廟をして瑚璉を陳ぜしむれば、重ねて見ん 薰風の山川を被ふを）」の「薰風」は『孔子家語』「辯樂解第三十五」からの出典であり、原典はいう、「昔者舜彈五絃之琴、造『南風』之詩、其詩曰、『南風之薰兮、可以解吾民之愠兮。南風之時兮、可以阜吾民之財兮。』（昔者、舜 五絃の琴を弾き、南風の詩を造る。其の詩に曰く、『南風の薰や、以て吾が民の愠りを解く可し。南風の時なるや、以て吾が民の財を阜にす可し、と。』」^⑯

符節を合するが如し、「日本資本主義の父」ともいわれる、かつて江戸幕府の徳川慶喜將軍の家臣・幕臣を務めた、渋沢栄一（1840～1931）の『論語講義』「先進第十一」にも『論語』の大義名分論による頼山陽の尊王史論を次のように論述する。

一日子然、孔子に向っていうには「仲由・冉求の二人は大臣の資格を具えた人といって差し支えありませぬか」と問うた。

孔子これに対えて曰く「子は何か異事すなわち変わったことをお尋ねなされるのかと謂えるに、かの二人のことをお問いなさるのか」といい放ち、かの二人はいうに足らぬといわんばかりの語氣にて、二子を軽んじまずその問を折き、しかるのち詞を改めて曰く「いわゆる一国の大臣なる者は（暗に季子を指す）、正しき道を以て君に事え、君をして礼儀により仁政を行わしむるようにし、もし君にしてその言を聴かず、道が行われぬ時には、節を屈して主君の意に従うようなことをせず、さっさと官を罷めて去るのみである（横逆君を無みすること季子のごとくすべからざるをいうなり）。由と求とのごときは、家宰なり。その職や微、一官一職の員に備える具臣というべきもの。称して大臣となすべからず」と。

子然これを聞きて心に愠り再問して曰く「もし然らば、二子は仕うる所の意に従順して、あえて違背せざるか、否か」と。子曰く「然らず。すなわち具臣といえども、君臣の大義に至っては平生よくこれを知っておる。ゆえに小事は主君の意に従うであろうが、子として父を弑し、臣として君を害するがごとき大逆には、かの二人といえども決してその主の意に従うようなことは断じてない」と明言せられた。以て季氏大逆の漸を抑えしなり。季氏の、八佾、庭に舞わす。子曰く「これをも忍ぶくんば、孰れをか忍ぶべからざらん」と。弑篡大逆なおまさに忍んでなさんとするを刺るなり。二章同じ意なり。ただ八佾は辞、婉にして意永く、この章は詞、

厲にして義、尽くの異あるのみ。この章は二子を主として説くべからず、季氏の邪謀を挫くを主として説くを要す。^⑭

洪沢栄一のこの論述を前述した「開元琴歌」の「若教清廟陳瑚璉、重見薰風被山川（若し清廟をして瑚璉を陳ぜしむれば、重ねて見ん 薰風の山川を被ふを）」即ち詩人菅茶山の政治「懷抱」（抱負）への適切な注釈といってもよい。言い換えれば、「開元琴歌」にける菅茶山の抒情した政治「懷抱」（抱負）—孔子の王道思想に立脚して、武家覇権を終了し、天皇を代表としての日本の「皇統垂無極（皇統 無極に垂とし）」なのである。これを以て、「薰風被山川（薰風の山川を被ふを）」即ち政治清明で人和民富たる天下となりそうという尊王主旨を唱っているのである。

俞樾の削除は王道と覇政との国体の性質についての認識上の中日政治文化観念の異なりを明らかにしたのではないか。

『論語』「八佾第三」はいう、「管仲之器小哉（管仲の器小なり）。」最近の中国の研究者は「『論語』の中には何回も管仲に言及、孔子は彼に賛否両論を持っているが、大きな面からいうと、褒められたのである。」という。^⑮これに対して、日本の『論語』読者は管仲否定論をいう。

管仲は齊（今の山東）の桓公の宰相となり、桓公を相けて諸侯に覇たらしめたる人にて、周公以後五百年間出の一大人傑として、人の推尊して措かざる所なり。しかるを孔子はこれを批評してその才能の小なるを歎惜す。これ管仲は覇業を成就せしも王業を興すこと能わざりしがゆえならん。

ある人（特にその名をあげざるは中以下の人にて名を言うほどの人にあらざりしならん）これを聞き、そのゆえを解せず、自ら疑うて謂えらく「孔子あるいは管仲の儉約なるを指して器小と評せらるるならん」と。よって「管仲は儉約か」と問えり。孔子これに對えて曰く「否。管仲は三帰という台を有し、また家臣に職事を兼摂せしめずして、毎職に専任の人を置きけり。何ぞ儉約ということを得んや」。

ある人さらにこれを解せずしてまた問うて曰く「管仲は儉約家ならずとせば、しからばすなわち礼を備うるがためか」と。孔子またこれに對えて曰く「否、管仲は上を僭して礼を失えり。その明証は、諸侯は門の内に屏を設け、以て内外を蔽い隔つれども、大夫はただ簾を以て内外を隔つべきものなるに、管仲は君の礼を僭して屏を設けて門内を蔽えり。また諸侯は他国の君と好会をなすときは、酒杯を置く反玷を設け、大夫以下はこれを設くることを得ざるに、管仲は君の礼を僭して、その家にも反玷を設けたり。管仲のなす所かくのごとくにして、なお礼を知るということを得ば、天下の人誰か礼を知らざるものあらんや」と。管仲の礼を知らざることを痛言せられたり。

孔子すでに管仲の器小といい、また奢侈にして儉約ならずといい、また礼を知らずと断言す。管仲を貶することはなほだし。孔子歿してのち百年孟子出で、孔子の意に基づきます王覇の別を明らかにす。ここにおいて天下後世始めて別に王佐の事業あることを知り、管仲の覇業

始めて陋しくなりぬ。ゆえにこの一章王覇の別を明かにするにおいて大いに力ありというべし。頼山陽始め学者の王道を唱え覇政を賤しめたるは、その淵源遠くこの一章にあることを知らざるべからず。しかして山陽以下学者の論旨は嘉安以来仁人志士によりて勤王論に具体化せられ、ついに明治維新の鴻業を成就するに至れり。ああ聖人の一言その効大いなるかな。¹⁹⁾

『論語』における管仲評価をめぐる日中読者の相反する見方が日中両国の「王道」史観の違いを現わしたのである。つまり日本は仁徳天皇を始め、儒教政治を実施して以来、史家が相変わらず『論語』を原典とする王道正統論を忠実に守っている——「維吾皇統垂無極（維れ吾が皇統無極に垂とし）」、異姓革命が認められないのである。「若教清廟陳瑚璉、重見薰風被山川。（若し清廟をして瑚璉を陳ぜしむれば、重ねて見ん 薰風の山川を被ふを。）」「清廟」即ち『毛詩正義』「周頌・清廟序」の「『清廟』、祀文王也。（清廟は文王を祈るなり。）」²⁰⁾。「薰風」即ち前述した舜帝の「南風」詩が唱った政治清明で人和民富たる「王道仁政」なのである。「開元琴歌」が「清廟」と「薰風」との中国伝統文化の政治理念を借りて詩人菅茶山の憧れる理想的な国体と清明政治は、孔子の『論語』が唱えている、周王朝の礼制を回復する王道国体と堯・舜・禹及び周文王を代表とする仁政即ち民を本とする、仁者愛人の儒教政治であり、こういう孔子の王道政治に反する中国の異姓革命を否定したのである。

というので、俞樾が清王朝の臣民として、王道と異姓革命とのジレンマに陥り、仕方無く、前述した「開元琴歌」中の「維吾皇統垂無極（維れ吾が皇統無極に垂とし）」からの十句の詩句を削除してしまったのである。

5. 宋詩と明詩の影響及び「中日比較」のユニークな漢詩境地

江戸後期の漢詩人友野霞舟（1791～1849）著『錦天山房詩話』は言う、「六如師、宋詩を唱えており、茶山継ぎて起り、詩風一変す」。²¹⁾

菅茶山は宋詩と明詩との同一性について、「ある人も七才子の詩を悦びしが、此頃幡然として体を変し宋調を学ばんといふ。余云詩の妙処は宋を必とせず明を必とせず、好處は明にも宋にもあり、魔處も亦然り、高青邱・李何・李于鱗がごときは、東坡・放翁に見せても拙とはいはざるべし、明人一時宋をそしる、流俗にも宋人才なしなどいふこと常言なれども、英雄人を欺く意多し。清の王漁洋、古来七言律の上手をかぞへて宋に陸放翁、明に崢峒（李夢陽一引者按）・滄溟（李攀龍）二李などいふこそ、平心の詞なるべけれ、今平心にて見れば、宋にも明詩あり、明にも宋詩あり、これは自ら見てみずからしるべきにや。」²²⁾

よくいわれたように、宋詩の一つ特徴は「学者の詩」、明詩の一つ特徴は「多くの叙事あるいは抒情的な長編詩と組詩を作った」。²³⁾

菅茶山の「開元琴歌」は宋詩と明詩との特徴を兼ね、特に結末の二句である「撫罢悵乎襲緑服、松声断続冬夜闌（撫し罷んで悵乎として緑服を襲へば、松声断続して冬夜闌なり）」は、明・呉

偉業（1609～1671）の「圓圓曲」の結末詩句である「為君別唱吳宮曲、漢水日夜東南流」（君が為に別に唱わん呉宮の曲、漢水 日夜 東南流る）を受容したと考えて間違いない。

しかし、「開元琴歌」は宋詩明詩ないしすべての中国詩人らの伝統詩作とは異なっている。これがユニークな「中日比較」という漢詩境地なのである。

言い換えれば、詩人菅茶山は、「開元琴」という中日文化交流の証しを通じて、まずは千年以上に亘っている中日文化交流の広い歴史空間を示し、「胡塵」即ち「安史の乱」からの唐宋王朝の滅亡と「五雲迷乱」即ち中国の「安史の乱」に類する日本武家内戦による天皇王権の弱化との比較をしつつ、杜鵑の鳴き声の悲痛さのように、深遠な思考と厳しい批判を唱っている。つまり、国家統一の象徴である王道即ち王権の旗下で改革を行うのは、聖人儒教の原典と国家安定と発展の唯一の正しい道であるが、覇業即ち王道に背いて武力によって政権を奪った武家政権は、天下大乱が止まない状態になってしまったし、政治倫理上で聖人の王道主張に逆い、東洋的な儒教主義とでは所詮相容れないで、「合久必分」（合して久しければ分かれる）の戦禍の種でもあり、内乱の反復再生による歴史悲劇が悪循環の直接動因でもある。

菅茶山の詩論は「心つくべき」や「必しも心を用ふべからず⁹⁾」を強調している。菅茶山にとって、優れた詩歌では情意と真心しか歌われないから、これに反して劣詩即ち模擬造作で無情無意の偽詩なのである。

「開元琴歌」は真心を込めて作成された史詩なので、読者を中日歴史文化時空の対比を通じて、中日文化交流の華華しさと日中政治文化の同異に認識させる、優れた漢詩珍品に値するといつてよい。

注釈

- ① 富士川英郎「祝『黄葉夕陽村舎詩』復刊」、児島書店1981年第3頁
- ② 中村真一郎著『江戸漢詩』、岩波書店1998年第5頁
- ③ 水田紀久校注『菅茶山詩集』、新日本古典文学大系66、岩波書店1996年第59頁
- ④ 曹昇之・帰青 點校『東瀛詩選』上册、中華書局2016年第336頁

本稿の「開元琴歌」のテキストはこれに拠る、訓読は水田紀久校注『菅茶山詩集』、岩波書店1996年による

- ⑤ 東京国立博物館編『法隆寺献納宝物』（便利堂1975年）によると、国宝七弦琴、中国で製作され、奈良時代に伝来した。桐材の本体に黒漆を塗る。1本の弦を指で押えて、高低さまざまな音を出す。琴の上面には、丸く切った具13個を一行にはめ込んで、指で弦を押える場所を示す徽が表されている。琴首の突起部、尾端部には紫檀の別材を用い、胴には縦長の響き孔が2カ所ある。胴の内部の「開元十二年歲在甲子 五月五日於九隴縣造」という墨書銘から中国・唐時代、玄宗皇帝が在位していた、開元12年（724）に、四川省成都市に近い九隴

県で製作されたことがあきらかで、製作年代と製作地がわかる最古の七弦琴である。

- ⑥ 『弘明集』 卷三、『四部叢刊初編子部』、上海商務印書館縮印明刊本、第45頁
- ⑦ 許慎著『説文解字』、中華書局1963年第79頁
- ⑧ 袁柯著『山海經校注』、巴蜀書社1993年第337頁
- ⑨ 高田真治『詩經』 上、漢文大系第一卷、集英社1966年第14-15頁
- ⑩ 高島要編『東瀛詩選本文と総索引』、勉誠出版2007年第122頁
- ⑪ 北島正元著『江戸時代』、岩波新書1958年第174-175頁
- ⑫ 北島正元著『江戸時代』、岩波新書1958年第167-168頁
- ⑬ 『黄葉夕陽村舎詩』、児島書店1982年第131頁
- ⑭ 李均洋・佐藤利行編『菅茶山漢詩研究・全編』、白帝社2016年第606頁
- ⑮ 黒川洋一「菅茶山の『開元琴歌』について」、「懷徳」第58巻、1989年第21頁
- ⑯ 宇野精一著『孔子家語』、新釈漢文大系53、明治書院、1998年第3版第418頁
- ⑰ 渋谷栄一著『論語講義』 第四巻、講談社1977年第193-194頁
- ⑱ 張燕嬰訳注『論語』、中華書局2009年第255頁
- ⑲ 渋谷栄一著『論語講義』 第一巻、講談社1977年第193-194頁
- ⑳ 孔穎達疏『毛詩正義』、上海古籍出版社1990年第705頁
- ㉑ 友野霞舟著『錦天山房詩話』 下冊、日本詩話叢書第九巻、文会堂書店、大正10年（1921）第484-485頁
- ㉒ 菅茶山著『筆のすさび』 卷之四、『日本随筆大成』 第一巻、吉川弘文館、昭和2年（1927）第132-133頁
- ㉓ 周振甫著『詩詞例話』、中国青年出版社1979年第2版、杜貴晨選注『明詩選』「前言」、人民文学出版社2003年第1版を参照）
- ㉔ 菅茶山著『筆のすさび』 卷之三には「（前略）詩歌はさらに心つくべきにや、歌に、『まつ人の麓の路やたえぬらん軒端の杉に雪おもるなり』、これらの意は尋常なれども、語はおもくしてつよし、撰出が多かるべし。老杜が詩をよみて後に後人の詩を見れば、いづれも弱く軽く、おもはるるうち、明の李崕峒のみ杜が遺響ありといふ（中略）詩は歌謡なり、必しも心を用ふべからず（後略）」と論じる。『日本随筆大成』 第一巻、吉川弘文館、昭和2年（1927）第114頁

中日文化交流的輝煌和中日政治文化的異同

— 論菅茶山の史詩式漢詩《開元琴歌》—

李 均 洋

【關鍵詞】菅茶山，開元琴歌，史詩，中日文化交流和政治文化

《開元琴歌》是一首七言古詩，寫作于天明六年（1786）末，共70行490字，真部一韻到底。菅茶山以一千多年的歷史時間為縱線，以中日對比歷史觀和文明觀為橫線，構建了一個上至周文王，下至日本光格天皇（1779～1817年在位）的詩歌意象空間。《開元琴歌》的情感基調集中在一個“憤”字上。這是一首史詩式的“真詩”，讓讀者在詩人中日歷史文化時空的對比吟唱中，領會到了中日文化交流的輝煌和中日政治文化的異同。是一首難得的海外漢詩珍品。